カブトムシの目

三代渡吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
カブトムシの目

【Ｎコード】
Ｎ９２０３Ｅ

【作者名】
三代渡吉

【あらすじ】
楽しむ心を忘れてしまった少年がいた。幼馴染を昔みたいに元に戻そうと奮闘する少女がいた。すれ違いズレる二人をつなぐキッカケになったのは、カブトムシだった。

彼は、夏が嫌いだった。
もっとも、暑いと寒いのとでどっちが苦手といったら、彼は寒いほうがずっと苦手である。
苦手とする寒波が毎日のように襲ってくる。
そんな地獄のような冬の億劫さを凌ぐほど、彼にとって夏は嫌な季節であった。
夏の初め、セミが鳴き始めると、ただでさえ無愛想な面を下げて歩く彼の額に、シワが増える。
それを見ると、同級生達も億劫になって、彼のシワが伝染したように、揃って顔を歪ませた。
「また、オッサンみたいな顔しちゃってさ！」
すると、歪んだ表情の学生達に囲まれながら、彼の前には一人の少女が現れる。
これが彼の周りにおける、夏の恒例行事みたいなものだった。
少女は、いろいろと説教してみせるが、彼は全く聞く耳を持っていなかった。
無駄だからやめておきなよとクラスメイトに言われても、彼女は決して彼に言葉をかけることをやめなかった。
容赦なく鳴き続けるセミの声を聞かされ、ただでさえ憂鬱なのに、さらに御節介女の説教。
どうして夏とは、こうまで自分を苦しめるのだろう？
もっと暑くなってもいいから、このうるさい連中を黙らせてくれ、とつくづく彼は思った。
「何を言っても無駄なんだよ、中橋（なかはし）さん」
「私はコイツの幼馴染だから、嫌でもコイツのことは良く知ってる。コイツは、林貴（りき）はこんな腐ってなかった……なのにこんな生ゴミみたいになってさ、毎年毎年腹が立つ！」

それはこっちの台詞だ。林貴は机に突っ伏しながらそう頭の中でつぶやいた。
なおも中橋は、彼にあれやこれや、関係ないことまで彼のせいにして怒ったが、チャイムの音が鳴り、渋々退散してしまった。
お熱いねーなどと冷やかすクラスメイトもいたが、林貴はそんな野次に興味を示すことなく、そのまま机の上で眠りについた。

夢の中で目覚めると、彼の周りは炎に包まれていた。
またこの夢だ。
林貴は、このような夢を、夏になると決まって多く見るようになる。
これこそ、夏が嫌いな理由の一つである。
その時彼は、決まって誰かに見られているような気になって、気分を激しく悪くする。
こっそり見られているのではない。大々的に上から見下ろされているかのような感覚だ。
誰がこっちを見ているのか、林貴はそれを知りたくて、いつも慌しく首をあちらこちらへ向けて探しているが、いつまで経ってもその主とは出会えなかった。
そして、最後は炎に焼かれて死んで、目が覚める。

目が覚めると、制服用のYシャツが汗まみれになって、酸っぱい匂いがするようになる。
これだから夏は嫌いだ。林貴はつくづくそう思った。
もし、毎年のようにこんな夢を見ることがなければ、もう少し林貴は開放感のある夏を好きになっていたことだろう。
汗まみれになりながらも、彼は意地になって二度寝しようかと考えた。
が、それはヒラヒラと落ちてきたハンカチによって阻止される。
ハンカチは、もはや見慣れた中橋のものだった。

こんなことをするから、二人は付き合ってるなんて根も葉もない噂が立ってしまうんだ。
林貴は、今日何回目かわからないうんざりに、深くため息をついて、汗を拭き取った。
そろそろ自分のハンカチを買わなくては。つくづく彼はそう思っていた。

今度は、夏の夢だった。
丘に咲き誇る向日葵の数々は、彼をそよ風の心地よさへ誘うように、静かに揺れていた。
視線を獣道に移すと、花畑の先には自分を緑みどり）と呼ぶ少女がいた。
彼の身近な人物で、名前が緑の奴といえば、中橋しかいない。
中橋緑それが林貴の幼馴染である彼女のフルネーム。
昔は彼女のほうがずっと背が高かった。
小さい頃の林貴は、緑を少し見上げてしまうほどの背しかないようなチビだった。
だが、小学校高学年になってくると立場は逆転していって、今では五センチも差をつけている。
緑を超えたと悟った時、彼は口に出さず相当嬉しがったものだが、今目の前にいるのは、自分が見上げていた頃の彼女。
どうして、緑との昔の記憶を夢で見ているんだろう？
所詮は夢であるからして、全てが昔の記憶と一致しているわけではない。
一部の向日葵の色が、時折赤になったり緑になったりしているし、その丘にはなかったはずの小さな山小屋や風車も見える。
林貴の地元で、そんなものを見たことは一度もない。
これが夢だとすぐにわかったのもそのためだが、彼は知らず知らずに夢へ引き込まれていた。
「林貴ー！　早く来い！」

ワンピースなんか着て、頑張って女の子らしくしてるのにどうも口の悪い緑。
そんな彼女に急かされて、林貴は仕方なく走った。
そして、辿り着くや否や、早速彼女は森の方を指差した。
明るい向日葵畑とは対照的に、そこは暗い世界であった。
それと対峙してみると、彼の胸の中にどす黒いものがジワジワと流れ込んでくるのがわかった。
そして、いつも炎の上から自分を眺めている視線も感じた。
あの先にいるものはなんなのだろう？
林貴はそれが知りたくて足を進めようとしたが、緑に腕を掴まれた。
「戻れなくなるよ」
緑に止められた途端、林貴は猛烈にあの森へ行かなくてはいけない気になった。
離せといったが、緑は離してくれない。
というより、これは本当に女の子の腕の力なのだろうか？
その怪力が恐ろしくなって、林貴が力を弱めると、緑は手を離して俯いた。
本当にこいつは緑なのか？
林貴は、少しビクビクしながら、彼女の顔を覗うと、緑は顔をあげて、林貴を見下ろす形になった。
そこにあったのは、緑の顔をした別人だった。
顔は緑そのものだったが、目が違うのだ。
目に人間的な光が……表情がない。
が、その無表情な目からも、悲しみと切なさが入り混じったような、複雑な感情が篭っていることだけはわかった。
それもまた、人間的ではないが。
「もう、いいんだよ」
緑の声だが、緑ではない者がしゃべった。
「あの暗闇に入る必要はないから。もう、あの向日葵に向けて歩き

出していいんだ」
緑ではない者が、林貴にそう告げると、もう目の前に緑はいなかった。
林貴は、彼女の名前を呼んで、探して見るが、どこにもいない。
気づけば、もう辺りには森も向日葵もなかった。
ただ、暗闇だった。

自分は何かを思い出そうとしている？
それとも、忘れ去ろうとしている？
林貴は、汗だくになったシャツを仰ぎながら、帰り道をダラダラと歩いていた。
歩きながら、断片的に覚えている夢の内容を回想して、じっくり整理していた。
夢だったから、あの時は冷静に思い出すことが出来なかったが、今はわかる。
地元にあんな向日葵の丘はない。
大体、自然豊かな風景など、林貴が生まれた時にはほぼ開発されていた土地に、あるわけがなかったのだ。
あの風景を見たのは、ここじゃない。
もっと遠い、どこを歩いていても緑の匂いがするような田舎。
婆ちゃん家だ。
小さい頃、両親が出張でいなくなるという緑を連れて帰省した、母の実家。
だが、あの時は至って平穏で、何もなかったはずだ。
それとも、自分が忘れているだけなのだろうか？
緑に聞いてみようかと思って、林貴はすぐに否定した。仲が良かったのは、もう昔のことだ。
一体いつからすれ違うようになったか覚えていない。
けど、理由はともあれ、今はもう林貴にとって中橋緑という人物は、ただのクラスメイトという間柄だ。

緑だけが、勝手に仲の良い幼馴染だったという過去を振りかざしているだけなのだ。
今更仲直りしたいとも思わない。第一、原因もわかっていないのだから、何をどうしたら良いのだろう？
もやもやした気分を抱えたままに、林貴は家に帰ると、すぐにベッドに寝転んだ。
そして自分を嘲笑った。
緑だけじゃない。自分にはもう、友達なんてものは存在しないのだ。

翌日も、林貴はいつも通り孤独に登校した。
そもそも、林貴がやってきても、誰も気に止めなかった。
このクラスにとって、彼は取り損なわれた埃みたいな存在だった。
大掃除みたいな大イベントの時だけ、皆に仕方なく話しかけられ、彼も一応応じる。
だがそれだけ。終わればまた彼は教室の埃と同じになるのだ。
でも、その埃をじっと観察する物好きな奴がいた。
緑だ。
彼にとっての緑も、今となっては他のクラスメイトと同じ、埃同然だった。
ちょっと纏わりついてくる、性質の悪い埃か、そうじゃないかという違いだけだ。
だが、今日の埃は一味違った。
「聞きたいことがあるんだけど」
といって、緑は林貴の机のうえに何かをそっと置いた。
周りの埃同然にしか思っていないクラスメイトが、林貴の机を見て騒ぎ始めいる。
クラスメイトが、ただの埃からやかましい喧騒にランクアップしたのを鬱陶しく思いながらも、林貴は顔をあげた。
途端、まるで刃物でも突きつけられたかのように、席から飛び退

いた。
「ど、どうしたの林貴？」
林貴は、ゆっくりと首を振った。
それはどんどん間隔を縮めていき、最後は本人の両手で押さえつけられた。
埃が散乱するかの如く、林貴が絶叫して存在感を出したかと思うと、そのまま彼は教室を飛び出してしまった。
「まだ、林貴は引きずってるんだ……だから」
そうつぶやいて、緑は彼の机においたものを見た。
それは、虫かごに入った一匹のカブトムシのメスだった。
「だから林貴は、林貴はあの時から変わっちゃったんだ」

林貴は、屋上でしばらく震えていたが、何もいないことがわかると、ホッとしてその場に寝転んだ。
次の授業は欠席だな。
別段真面目に受ける気も、取り立ててフケたいと思う気もない彼にとって、それは些細なことだった。
風が心地よい。
夏が始まると嫌な気分になる代わりに、風が人に心地よさを運んできてくれる。
精神的に最悪な気分になる夏において、これだけが唯一の救いだった。
ガチャリ。
屋上の古い扉が開く音がした。
もしかして教師が来たのか？　それなら別に、叱られて教室に戻って、寝ればよいだけの話だ。
だけどそれがもし、もし緑だったら。
林貴にとっての埃が、今はまるで彼に襲い掛かってくる刺客か何かのようだった。
案の定、やってきたのは緑だった。

足が異常に震える。何故だかはわからなかったが、緑が怖かった。
いや、厳密にいえば彼女が持ってきたものが、恐ろしくてたまらなかった。
あの記憶が、罪悪感が、後悔が蘇る。
だが、やってきたのは緑だけだった。
危惧していたものがやってこなかったので、林貴が一息吐くと、緑を無視して屋上から立ち去ろうとした。
すると緑は、ムスッとした顔で彼の前に立ち塞がり、彼の行こうとする道を身体全体で塞いだ。
なんて鬱陶しい。こうなったら一発殴ってでもどかしてやろうか。
そういう意図を林貴は目から出した殺気で訴えたが、彼女は断固動かなかった。
しばらく睨みあっている内に、緑は少し頬を膨らませたようなしかめっ面で、彼に言った。
「私より……」
「……」
「私より背が高くなったからって、無視出来ると思ったら大間違いだから」
「……？」
「偉そうな態度とれるかと思ったら、大間違いだから」
「……」
林貴は、緑が悔しそうな顔でそんなことを言うので、つい腹の底から笑いたくなってしまった。
しまったと思って口を抑えるが、抑えようがなかった。
町中に響くのではないかというくらい、大きな声で林貴は笑った。
「悔しがってんのか？　そうか、悔しいのか？」
「えっ」
「いい気味！」
と、林貴はまた馬鹿笑いした。
緑は、それに対して怒るかと思ったが、穏やかな表情になった。

「林貴の声聞くの、久しぶり」
「くっ……」
「黙るなバカ！」
今度は怒った緑が、彼の腹にエルボーを食らわせた。

「サボリだな」
「林貴もね」
「俺はいいんだ。存在感ないから」
久しぶりにまともにかわした会話が、憎まれ口の叩きあいだった。
愛想のない会話で二人はまた少し無言になったが、すぐまた緑から口を開き始めた。
「なんでいきなり、アンタが無愛想になったか。さっきわかったよ」
「……」
「引きずってたんだね。思い出したんでしょ？」
「……さあ」
「だったら逃げないよね。カブトムシを見てさ」
「……やめろ」
林貴は、カブトムシを見て全てを悟っていた。
あの夢の中でいつも自分を見ていたものが何だったのか。
緑の姿で自分に何かを言っていた何者かが、誰なのか。
「もう良いでしょう。どんなにアンタが一匹狼気取ったって、帰ってこないんだよ？」
「うるさい」
「見てられないんだよ。アンタが私と勝手に絶交しようと、そりゃ勝手だよ。だけど、それで他の人まで巻き込んで、恥ずかしくないのかね？」
「……？」
「そうやって、林貴が黙ってるから、みんな離れていくんだよ。バカ」
緑の目は、少し涙ぐんでいた。

こんな女の子らしいところがあったなんて、林貴はむしろそんなことで驚いていた。
「泣くなよ。ガキか」
「ガキはお前だバカ！　いつまでも同じこと引きずって」
「言うな……」
「それで、カブトムシが帰ってくるわけでもないでしょうに。本当にバカじゃん」
「テメッ！」
林貴は頭にきて、彼女に殴りかかろうとした。
だが、脳裏に焼きついたカブトムシの映像が流れてきて、すぐにその気が失せた。
林貴は、その場に座り込んだ。
「ガンタは、俺が殺した」
「林貴！」
「俺が見殺しにしちまったんだよ！」
「……」
緑は、涙ながらにそう怒鳴る彼に、何も言えなかった。

小学校六年生の頃。
つまり小学生としては最後の夏休み。
林貴は、祖母の家に行って、たくさんカブトムシを獲った。
帰るときには、持って帰れないと元の自然に帰したが、一匹だけは彼が育てることにした。
ガンタと名づけられたカブトムシ。それは、彼が夏休みで獲ったカブトムシの中でも、一番大きなカブトムシのオスだった。
飼育セットやカブトムシ育成マニュアルなどを、祖母から貰った小遣いで買い込んだ彼は、毎日世話して可愛がっていた。
外を連れて見せびらかす奴はいたが、林貴だけは家まで遊びにきた友達にしか見せなかった。
カブトムシを見た友達は、みんな感嘆の声をあげ、自分が一番で

かいカブトムシを獲ったといっていた喧嘩好きの友達も、ガンタを見て竦んでいた。
箱入り息子、とはまさにこのことである。
寝るときも近くに置いたりするほど可愛がっていた彼だったが、ある日悲劇は起こった。
林貴の家が火事になったのだ。
原因はその後の調べで、敷地内に投げ捨てられたタバコのポイ捨てだとわかったが、彼にとってそれはどうでも良い話だった。
火事に気づいたのは、林貴が家に丁度帰ってきた時だった。
林貴は、集めていたカードや、大切にしていたゲームより何より、ガンタを心配した。
すると彼は、炎が広がり始めている家の中に、飛び込んでいったのである。
それを見た母親は、すぐにその後を追った。
これが幸いして、林貴と母は火傷一つ負うことなく、無事火事から生還することが出来た。
だが林貴は、ガンタが待っている自分の部屋の入り口に辿り着いておきながら、ガンタを救うことが出来なかった。
ヒステリックな母親の声と手に止められ、彼はすぐ引っ張り出された。
しかし林貴は、あくまでガンタの名前を呼び続けた。手を伸ばした。
手を伸ばした先には、林貴の方をじっと見つめているガンタの姿があった。
身動き一つせず、ただじっと林貴を見ているのだ。
あの時のガンタの目は、とても寂しそうにしていた。
あるいは、どうして自分を助けてくれないのかと、林貴を責めているようだった。
その後、焼け跡からはいくつも白い灰が見つかった。
カブトムシかどうかまでは、わからなかった。

「バカだよな。ムシがそんなこと思うわけないのに。どうせ夏の間だけの命なのに。今でもまだ、あの目が忘れられない」
「うん、バカだね」
「……ずっと笑ってろ」
「そうだね。頭ごなしに自分を責めてるって思ってる、林貴のバカさ加減が、おかしくておかしくて」
「なんだと？」
林貴が声に凄みを利かせたかと思うと、緑は立ち上がって、逆に怒鳴った。
「どうしてそう悲観的にしか考えられないの？　昔はそんなウジウジした奴じゃなかったのにさ」
人の気も知らないで……林貴も怒鳴り返した。
「見捨てられたんだ。誰だってそう思うだろ？　フツーはよ！」
「アンタがいつガンタを見捨てたの？　助けようとしてたんじゃないの？　なのに、そうやって自分を責めて、悲劇のヒーローのつもり？　バーカバーカ！」
「……助けられなかったんだよ！」
「助けられなくても、そんなの見捨てたうちに入らないよ！」
声が裏返るほど、緑は叫び散らした。
「そんなの私の勝手な言い分かもしれないけどさ、ガンタはさ、林貴に託してくれたんじゃないの？　自分の命を」
「……何奇麗事言ってんだよ」
「腐ったようなことしか言えない奴よりはマシだって思うけどね！　ガンタは、ずっと林貴を見てたんでしょ？　身動きせずに」
「……」
「死んだあとだって、林貴には前を向いて生きて欲しいって、そう思うはずだよ！　大事に暮らしてたんでしょ？　どうして信じてあげられないんだよ！」
林貴は、あの夢のことを思い出した。

……もう、いいんだよ。
……あの暗闇に入る必要はないから。もう、あの向日葵に向けて歩き出していいんだ。
夢の中で、緑の姿をしたガンタの言葉は、彼の頭にはそう記憶されている。
いや、間違いなくそう言っていたはずだ。
「……ガンタ、だったのかな」
「って……人の話を！」
「夢見たんだ。午前の授業中に……前を向いて歩けって、お前の小さい頃の顔で、そう言ってた」
緑は、それ以上怒鳴るのをやめた。
林貴の目から、また涙が流れ出ていた。
今度は、さっきに悲しい涙ではない。とても穏やかな涙だった。

帰り道に、緑に誘われて林貴は久しぶりに二人で帰宅していた。
思えば通学路はほとんど一緒だったのに、今まで一緒じゃなかったほうが不思議だった。
下駄箱で同級生二人が、埃を嘲笑うようにからかってきた。
恥ずかしさから林貴は、彼等に「うるせえ！」と物凄く剣幕で怒鳴り返すと、緑の手を引いてさっさと行ってしまった。
まさか怒鳴り返されると思っていなかったクラスメイトは、呆然と彼のことを見ていた。
そして、姿が見えなくなると、二人して穏やかに笑った。
「なんか昔に戻ったみたいじゃん」
「ああ。カブトムシを自慢してたあの頃の杉寺（すぎでら）みてえだ」
その時一瞬だけ、二人は自分達が小学校の頃に戻ったような気がしていた。

「まだ空き地だった。良かった」
二人とカブトムシ一匹は、火災の跡地にやってきていた。

消化活動がしっかり行われたために、隣の家々は少しススに汚れただけで助かっていた。
ただ一つ、杉寺家のみがほぼ全焼してしまったのだ。
改めてここにくると、林貴はトラウマと緊張で心拍数があがってしまった。
空き地に向かって一歩すら踏み出そうとしない彼に、緑は苛立って手を引いて、目的のところまで連れて行った。
「もう三年もご無沙汰だったけど、まだ残ってた」
そこには、小学校の授業で育てていた花の花壇に刺さっていた、名札のようなものが佇んでいた。
名札は雑草の中にうまく隠されていたが、名札にはちゃんと“ガンタの墓”と記していた。
墓前に座ると、林貴は深呼吸をしてから手を合わせた。
すると、自分の中に穏やかな何かが流れ込んできた。
誰かが喜んでくれたような、そんな暖かさがそこにあった。
わざわざ来てくれて、ありがとう。
前を向いてくれて、ありがとう。
そんな臭いことを言われたような気すらしたが、林貴は気のせいということにした。
結局いろいろ悩んでいたが、ガンタが何を思っていたかなんて、林貴にも緑にも実際はわからない。
ただ、わかっているのは、林貴が今日の今日までガンタのことを心の底で悔やみ、思っていた。それだけなのだ。
拝み終わって二人が立ち上がると、早速林貴は何のためにカブトムシを持ってきたのか聞いた。
「従兄弟が急にきてね、獲れたカブトムシを一匹くれたんだけど、育て方わからなくて。逃がすなんて無責任なこと出来ないし、それで聞こうと思ったんだ」
「へぇ、俺の傷を抉り出すためかと思った」
「私がそんな非道な女に見えたんだ」

「女らしくないしな」
林貴の一言に怒った緑は、しばらく空き地の中で彼を追いかけ回した。
気が済むまで走り回り、林貴は肩で息をしながら言った。
「夏休み、暇があったら俺の婆ちゃん家にいかない？」
「え、なんで？　逃がしにいくの？」
「そいつの友達を探しにいってやるんだ。せっかく貰ったんだろ？、このカブトムシにうるさい杉寺林貴が、全部教えてやるよ」
昨日までの無愛想な男が一転、随分と気さくになったものだと緑は笑った。
「って……高校生にもなって、それはないんじゃないの？」
緑がそう言うと、林貴は笑って答えた。
「教室に虫かご持って来る奴よりはマシだ」
誰のためにこんな恥をかいたと思っているんだ！
緑は怒って、また林貴のことを追い回し始めた。
それを、虫かごの中から、メスのカブトムシがじっと眺めていた。

夏休みの初め、林貴の祖母宅へ行った二人は、あの頃のように、泥だらけになって遊びまわった。
それは、林貴も緑も、あの仲の良かった頃の心を取り戻せたという証だった。

（後書き）

え、八千文字？　そんなバカな！
出来る限り切り詰めて書いたつもりが、こんなになっているとは、
ううむ。また読みにくくなっているのではないか。
今年の新年、合宿と称して今は誰も住んでいない祖母宅に一人で泊まりにいき、読書したり都会に残る自然風景鑑賞に勤しんでいた時、案として考えたのがこれでした。
いっそ思いついた時に書こうと思っているうちに、季節は流れ丁度良い頃になったので執筆。
久々に男女のラブコメみたいな関係を書いたので、いろいろとグラついてしまいました。
このジャンルはなんだろう？　文学とは違う気がするし、恋愛にも遠いし、コメディーではないと信じたい。
そんな困ったときはジャンル“その他”！　便利だけど味気ないなあ。

最後に、久しぶりにあらすじで悩みました。
これぱっかりは出てこなかった……。こんな複雑な話でもないのに。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9203e/

カブトムシの目

2010年10月8日15時21分発行